くらし■家庭

笑い

人はなぜ笑うのか。そんな謎に挑み、笑いの〝量〟を測る「笑い測定機」の開発に取り組む研究グループがある。健康増進に役立てようとする自治体もあり、新春を初笑いで迎える神事は全国各地で開かれている。共通する思いは一つ。今年こそ明るい年にしようと、願いを込めて――。（西村公慶）

パソコンを使って、笑い測定機の実験データを確認する木村さん（左端）と大学院生（大阪府吹田市の関西大学で）

測定機で謎に迫る

測定機は、関西大社会学部教授の木村洋一さん(59)（コミュニケーション論）のグループと、測定機器などを開発する会社「インターメディア」（京都市）が共同研究中。笑う際、筋肉が動く時に発生する電位（筋電位）の変化を1秒間に3000回測定。検出したデータをコンピューターで解析し、「おかしみ」度合いを独自の単位「AHA（アッハ）」で数値化する世界初の装置、という。

プロジェクトは大学の重点領域研究の一つとして、2007年春から始まった。笑う時の体の動きを研究し、正確に測定できる機器を開発。試作品を作り、学生らの協力を得て予備実験を重ねてきた。

実験では、4人のグループに分け、笑える小ネタを仕掛けた。びっくり箱を用意したり、お笑い番組を見せたり。電位の変化を測り、同時に顔の表情、声の大小を観察し、ビデオカメラで撮影した。

ある日、パソコン画面に映し出された電位を示す4本の線が、学生たちの笑いとシンクロするかのように上下に波立った。しかも「作り笑い」には振れず、おかしい時だけ敏感に反応した。「やっと笑い波をとらえることができたと思うと、震えるほど感動した」と振り返る。

■構想25年

測定機は、木村さんが25年間温めてきた仮説が基になっている。30歳の時、山小屋で友人と〝あやしい〟キノコ鍋を囲んだ。深夜、なぜだかおかしくてたまらなくなり、3時間笑い転げた。おかげで翌日から1週間、脇腹が痛かった。あまりのバカバカしさにあきれつつ、一つの謎が浮かんだ。

「人はなぜ笑うのか」

研究を重ね、1982年に導き出したのが、「笑いの統一理論」。簡単に言うと、笑いとは「ズレて、ハズレて、ヌケて、アフレる」の4段階から成るらしい。

「例えば、私が東北弁で話したとすると、関西弁とは違う『ズレ』に学生は笑う。生じたズレで脳幹の出力信号のスイッチが『ハズレて』、教授としての威厳が『ヌケて』空っぽになり、脳内に未知の神経伝達物質が『アフレ』出す――。その時の体の振動を測定すれば、笑いの量を数値化できるのでは」と考えた。

笑いについての研究の歴史は長い。古代ギリシャの哲学者アリストテレスをはじめ多くの研究者が取り組んできたというが、そのメカニズムは未解明だ。最近ではストレス解消や免疫力の向上など健康にいいとされているが、因果関係はわかっていない。

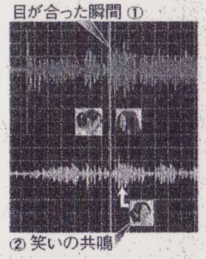
「笑いは数字のゼロ、あるいはコンピューターの再起動だと思う。フリーズしたものを、再起動させてくれる力がある。苦しくても悲しくても、この世を笑い飛ばすことができれば、人はゼロから再出発できると信じている」

■親子支援

実験を繰り返すうちに、ある波形に興味を持った＝写真左。びっくり箱に驚き、机に突っ伏すほど笑っていた女子学生（上の波形）が一瞬、隣の友人（下の波形）と目が合った＝①。さほど笑っていなかった友人が1秒後、噴き出した＝②。「つられ笑い」がはっきり波形に表れたのだ。

その笑いの共鳴を、親子関係に生かせないか、と木村さんは考えている。赤ちゃんとお母さんの笑いの共鳴を測り、それが人間には大切なコミュニケーションであることを立証する。保健所などを拠点に一緒にあやしたり、遊んだりする支援プログラムを始めようと、模索している。

目が合った瞬間 ①



② 笑いの共鳴

測定機はミカン箱ほどの大きさになる予定だが、将来は小型化も夢ではないという。ためこんだストレスを吹き飛ばし、ゼロから再起動させてくれる「笑いの力」をグラフや数値で見ることができるだろう。木村さんはネーミングも用意している。

「『わらおっち』なんて、いい名前だと思っているんだけどね―。おおらかで愉快な笑いが切り開く新しい世界を、これからも追求していく。

◇

関西大は測定機の特許を申請中。今年2月23日に大阪府吹田市の同大で、完成品を披露する。

人間関係見直すきっかけに

日本笑い学会会長で関西大名誉教授　井上宏さん　71

学会は1994年、笑いを色々な観点から研究しようと発足し、会員数は約1100人。海外でも、「国際ユーモア学会」が今年7月にスペインで開催される予定だ。これまで学会でも、健康増進との関係など様々な研究が発表されてきたが、笑いの量を測ろうといった試みは世界でも珍しい。

家庭で、学校で、職場で最近、一緒に笑う機会が減ったように思える。しかし、日々の暮らしにこそ笑いがある。見つけて拾って、共に笑い合う。「笑い測定機」が、そんな人と人との関係を見つめ直すきっかけになってくれればと期待したい。

各地では――

和歌山や京都で初笑い神事

毎年10月の奇祭「笑い祭」が伝わる和歌山県日高川町の丹生神社では3日から13日まで、「初詣で初笑い神事」が開かれる。白く塗った顔に赤い字で「笑」と書いた道化役の「鈴振り」が、「笑え、笑え。家（永）楽じゃ、世は楽じゃ」と、参拝客に笑いを振りまく。

神様の集まりに寝坊し、ふさぎ込んだ同神社の氏神さまを慰めようと、村人たちがはやし立てたのが由来。初笑い神事は2年前から始まり、今年は、鈴振りに似せて作られた「WARAIロボット」もお目見えする。

京都府亀岡市の千ヶ畑地区でも3日早朝、西山神社の氏子が集まって、今年の恵方に向かってしきびを高々とあげ、初笑いをして、豊作を祈願する「歳振り神事」が行われる。

約800年前の鎌倉時代から続く山口県防府市の「笑い講」は、毎年12月上旬にある。紋付き、はかま姿の氏子らが酒盛りをした後、二人一組で向かい合い、「ワーッハッハ」と3度繰り返す。最初は今年の豊作を喜び、2回目は来年の豊作を祈り、最後は一年の苦しかったこと、悲しかったことを笑い飛ばすためという。

鈴振り（手前中央）に導かれ笑う参拝客ら（2007年1月、和歌山県日高川町の丹生神社で）

福井県が推進事業

平均寿命が男性が全国4位、女性が11位の福井県は昨年7月から、「笑いと健康」推進事業に取り組んでいる。医学的効用を研究する医師を講師に招き、福祉施設の職員らの研修会を開いたり、各保健所で落語のCDや教材を貸し出したりしている。

同12月には、笑いと健康に関するイベントを開催＝写真。マニフェストに『笑い』の実践を盛り込んだ西川一誠・同県知事は「笑いやユーモアを取り入れた生き生きとした毎日を送ってもらいたい」としている。

カレンダー格安販売で被災地支援

今年のカレンダーを販売し、災害被災地への支援活動費用などにあてる「第12回カレンダー市」が13、14の両日、兵庫県西宮市の同市役所東館8階大ホールで開催される。NPO法人「日本災害救援ボランティアネットワーク」の主催。不用となり、提供を受けたカレンダーを1部100円程度で販売。収益金を新潟県中越沖地震の被災地でのボランティア活動や、今後起こる国内外の災害での直接、間接の支援活動費に回す。両日とも午前10時から午後6時まで。問い合わせは、同ネットワーク（078・231・9011）まで。

こどもの詩

きょうりゅう

西沢　直輝

きょうりゅうが生きていたとき
6千5百万年まえ
いんせきがぶつかって
すごいけっこうを　おこした
ぜんぶのくににマグマが
いきわたった
ぼくは　あたまの中にうかんだ
（神奈川県藤沢市・鵠洋小1年）

◇

頭の中ってふしぎだね。みんな、頭の中にあるんだ。6500万年前の時間も。もういない恐竜も。今のきみも。（長田　弘）

毎日を大切に生きたい

テイータイム　TEA TIME

中村　佳子（神戸市北区、主婦、54歳）

一年の始まりにあたって、人はいろいろな目標を立てることでしょう。私は2年前、胃をすべて摘出する手術を受けました。がんに侵されていたのです。それだけに今をこうして生きていられることは、決して自分の力ではなく、家族や友人ら多くの人の支えがあればこそと、感謝の気持ちを忘れずに毎日を過ごそうと思います。

昨年は抗がん剤治療の日々で、副作用のきつさに加え、脱毛や体重減少で変わりゆく自分の姿を見ては、気落ちすることの多い年でした。それでも、髪の毛がなくなってしまう時、泣き言をいう私に、夫は「薬が効いているのだから」と優しく声を掛け、いつも「大丈夫、大丈夫」と励まし続けてくれました。つらいのは夫も同じだと思うと、せめて笑顔を向けていこうと、勇気をもらうのです。

今年は1月に長男の結婚式、そして夫は還暦、定年を迎えます。笑顔で夫に直接ご苦労さまでした」と感謝の心を伝えられるよう、一日一日を大切に生きていきたいと思っています。